

生存科学研究ニュース

VOL. 16, NO. 6 2001. 11. 10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608
Eメール seizon@mx1.alpha-web.ne.jp

第2回常務理事会報告

平成13年9月13日(木)生存科学研究所会議室において標記会議が開催され、下記の項目について討議された。

- (1) 委員会・研究会の活動について
- (2) 財務状況について
- (3) その他

(1) 今年度、現在までに開催された委員会・研究会について、それぞれ、責任者ならびに江見理事長より記録を基に委員会・研究会報告が行われた。また、レオンチェフ文庫関係について、江見理事長より経過と今後の予定について報告が行われ、取り交わす書類の内容について確認が行われた。

(2) 鈴木専務理事より8月末日現在の収支計算書を基に現状説明があり、順調に消化しているが、今後も当初の計画を鋭意実行して行きたいとの方針が述べられた。

(3) 鈴木専務理事より文部科学省による実地検査とその結果通知までの経過が報告された。これを受けて、今後の対応について話し

合われた。

生存科学講座委員会報告

平成13年9月7日(金)生存科学研究所会議室において「生存科学研究の今後のあり方」をテーマに標記委員会が開催された。

概要：生存科学研究所に現在欠けているものは、EBMのような科学性を踏まえた考え方であるように思え、独自の考え方で川崎病解明に尽力されている特定非営利活動法人日本川崎病研究センターの川崎富作先生に「科学性と、生存科学研究の今後の在り方」について講演していただいた。内容は次のとおり。

1. 生存科学とは

生存：人類が生き続けるという価値判断を含んでいる

科学：自然の中から新しい一般法則を創造すること、そして研究は仮説と実証とを峻別することが重要であると説かれた。

2. 人間の生存を脅かしてきたものの代表と

して、天災地変、戦争、疫病を挙げられ、その他、食糧問題、人口問題、環境問題、生殖科学、生命倫理、核問題なども全て生存に結び付いているとして、このような各分野でのテーマをintegrateすべきであろうと述べられた。

3. 生存科学研究の目標

各々のevidenceをしっかりと踏まえ、各分野の人が集まって議論を起し、さらに各分野に戻って、分科の形を造り、それを統合することが、重要だと話された。

4. 科学の精神

ベルツの日記から：自然の探求や、世界の謎の究明のため、西洋の傑出した人々の数千年に亘る汗と血と涙で示された努力と苦難の道を顧みられた。

生存科学研究所および科学研究を目指す者にとって示唆多い講演であった。（小島静二記）

21世紀医療システム研究会報告

平成13年10月7日（日）生存科学研究所会議室において、上記研究会の拡大委員会として、次の3名からヒアリングを行った。

濱田 宗雄氏（拓殖大学教授）

佐藤貴一郎氏（国際医療福祉大学教授）

増田 隆昭氏（淑徳大学教授）

（1）冒頭、江見委員長から、9月19日に行われた医療経済研究機構の公開シンポジウム「医療制度改革のゆくえ-医療サービスの質の向上と効率化」の内容について紹介があ

り、医療の質の評価は従来のように供給側の視点からのみ行われるのではなく、患者の側の視点を含めて評価されねばならない、との委員長のコメントが示された。

（2）医療システムの研究については、佐藤貴一郎氏の「社会サービスとしての医療サービス」についてのレジюмеを中心として、討論が行われた。その要点は次のとおり。

- ① 医療は市場メカニズムが機能しない特性を持っている。一つは医師と患者の間の「情報の非対称性」で、これを多少とも補完しようとするものがインフォームド・コンセントの概念である。第二は、患者の医療費の負担に対する価格弾力性は小さく、その負担を軽減して受診機会を保障するものが社会保険制度である。第三に、医療の公共性・社会性にかんがみて、医業には種々の規制があり、そのことが一般市場の形成を抑制しているが、介護保険が市場原理を導入したこととの差に注目すべきである。
- ② 他方、医療はサービス業としての特性を持ち、医学教育の見直し、生涯研修などによる医師の質の向上と、患者への適切なサービスを可能にする病院経営の効率化などの諸点が、「医療保険の抜本改革」と合わせて推進される必要がある、健康観の変化とともに、医療保障が生存保障であることを改めて認識すべきである。

川崎病研究会報告

平成13年10月19日（金）午後4時より生存科学研究所会議室において標記研究会が行われた。当研究会は平成11年9月よりNPO法人日本川崎病研究センターとの共同研究により、川崎病の病因および発症機序の解明や川崎病国際研究の推進など8項目の研究を行ってきたが、今回は平成12年度の研究事業の中から、次の2項目につき研究報告が行われた。

(1) 川崎病の歴史から病因を探る-川崎病の出現時期を特定する研究：

昭和元年から昭和23年までの日本小児科学会雑誌の検索では川崎病と診断し得る症例報告はなかった。昨年度の調査とあわせると、文献上わが国の川崎病出現時期は昭和27年頃と推定された。また、昭和15年から昭和40年までの東大小児科の退院カルテの検索では昭和25年に川崎病と思われるカルテが見つかった。これは文献検索より2~3年早かった。この結果、日本における川崎病出現時期は昭和20年代後半と推定された。

(2) 川崎病の原因抗原を明らかにする研究：

従来の方法では病因抗原を特定する試みはすべて失敗してきたので、新しい試みとして癌の抗原を同定しうる方法（SEREX法）を川崎病に応用して、川崎病の病因因子を確定する目的で、山口大学小児科（臨床）と岡山大学免疫学教室（基礎）との共同研究が平成11年度より行われて来た。今年度はヒト臍帯静

脈由来の血管内皮細胞の培養細胞からの充分量のcDNAを大腸菌に組み込んで発現した蛋白に、一例の川崎病回復期血清を反応させて62個の遺伝子が同定できた。このような実験を多数例に行い、その中から川崎病に特異的な抗原遺伝子を特定する研究が現在進行中である。

本研究は時間と労力を大いに必要とするが、研究者達は鋭意努力中で、その成果が期待される。

銀座ナイトセミナー「生きる」報告

平成13年10月30日（火）午後6時より、十条通り医院院長・神奈川県勤労者医療生協副理事長の斎藤竜太氏を招いて、標記セミナー「『不法就労』外国人の『生きる』」が開かれた。氏は、この10年間、横浜の港町診療所を中心に、オーバーステイ（超過滞在）の外国人労働者を主な対象とした移住労働者のための民間の国民健康保険ともいえるべき、「みなとまち健康互助会」をつくり活動している。

斎藤氏は、岩手県沢内村で医師の両親のもとに育ち、社会主義体制下の東ドイツでの医学部留学、文化大革命下の中国での滞在、帰国後、医学部再入学後、医師として港湾労働者の健康問題に臨床の場から携わってこられた。1989年前後から、外国人労働者の患者を診る機会が増えたが、そこに共通するのは、症状が重くなってから来院することであった。それには、彼等は保険を持たない事で高額の治療費が掛かること、オーバーステイに

なっていること、医療現場ではぞんざいに扱われることなど、医療に遠い要因があった。そのため、医師、弁護士、NGO/NPOなど支援諸団体と当事者である外国人による議論から「みなとまち健康互助会」を1991年7月に設立した。

これは、主として日本の健康保険・生活保護制度による医療費の交付を受けられない外国人に対して、月2000円の掛金で、関連医療機関を国民健康保険と同じ3割の自己負担で受診できるものである。現在までの会員は、70カ国以上、のべ9000人を越える。入会の説明文書も6カ国語が用意されている。ただし、文化差や母国での保険制度の未整備などから必ずしも十分に理解されず、必要なときだけ加入し、その後会費を納めない場合もある。実際の運営は会費のみではならず、民間や祖国の在日大使館などの寄付でまかなっている。なお、政府からの支援は得られていない。

「生きる」について、氏より「死ぬ」こととの「距離」という捉え方が投げかけられた。携わってきた医療を通じて、「不法就労外国人」という呼称の問題点を指摘しつつ、彼らのそれは、日本人とは違って「近い」と感じる、とのことだ。氏の、自らの診療を通じた「実践」から、劣悪な労働条件で働く「不法就労」外国人には、健康問題や社会保障の問題が典型的に集中している、との問題提起がなされた。9月11日のニューヨークのテロ事件のこともあり、イスラム圏からの労働者を含めて、セミナーの参加者と議論がか

わされた。(津谷喜一郎・金子善博)

研究所日報

- 9月7日(金) 生存科学講座委員会
- 9月13日(木) 常務理事会
- 9月13日(木) 基本構想委員会
- 10月4日(木) 編集小委員会
- 10月6日(土) 医療システム研究会
- 10月19日(金) 川崎病研究会
- 10月30日(火) 銀座ナイトセミナー「不法就労」外国人の『生きる』
- 11月10日(土) 世界の文明と生存研究会
「武見太郎の考えたこと：
芸術篇」

予 定

- 11月16日(金) 生存とバイエシックスの構築研究会「英国における未来の生命倫理の課題-クローンについて」
- 11月30日(金) 常務理事会
- 12月11日(火) 銀座ナイトセミナー
90才の『生きる』(企業の中の技術者の『生きる』)